



東京を本拠地とする丸玉屋小勝煙火店。江戸期元治元年(1864)創業で、日本国内にとどまらず海外でも活躍し、広くその名を知られている。その代表取締役で4代目の花火師小勝一弘さん。

「西欧と日本では花火の考え方、楽しみ方は違います。西欧ではイベントに迎えた来客に歓迎のしるしとして花火が打揚げられます。ウェルカム・セレモニーですね。だから打揚げ時間も短い。15分ぐらいです。日本では花火がメイン。花火そのものを楽しみますよね。花火の形状も、西欧では筒形で、一方向(筒の胴方向)へ花開きます。日本ではご存知のように丸玉です。大きく球状に開きます。」

日本人の花火の楽しみ方といえば隅田川の花火だ。享保18年(1733)に始まった大川開きの花火は、江戸期の終わりには“しだれ柳”“大桜”“流星”“牡丹”“昇り竜”などと名付けられたおよそ20種の花火が打ち揚げられていた。江戸の観客の

肥えた目と花火師の工夫と切磋琢磨が、今、私たちの楽しむ花火の原形を作り上げていた。

「当時の花火は黒色火薬のみでしたから、淡いオレンジ色の色でした」

と、小勝さんが指をさした壁には、隅田川を描いた浮世絵がかかっている。薄闇にオレンジ色の花火が描かれていた。木炭の燃える色を思い浮かべてもらえれば良いだろう。

「明治になってから塩素酸カリウムが輸入されて花火は変わりました。さらに大正になってマグネシウムやアルミニウムを光輝剤で使うようになって、この2度の進化で今の花火になります。今、日本にある花火店は皆、この2度の進歩を成し遂げてきたんです」

キャビネットの上、ヴェネチアガラスで作られた花火のオブジェが目にとまった。華やかな色彩のそのオブジェは、スターマインを連想させた。

「それは、サンレモ(イタリア)の世界花火大会の優勝トロフィーです。大きくて、持ち帰るのに苦労しました(笑)」

この優勝したイタリアをはじめ、イギリス・ドイツ・スペイン・ポルトガル・オーストリア・ハンガリー・カナダ・アメリカ・エジプトなど各地で、小勝さんの花火は打揚げられてきた。世界に誇る日本文化のひとつに花火がある。

「最近の花火は1万発、2万発、3万発と花火の発数を誇りますが、かつては10発、15発でもすごい数でした。そこには大きな玉の楽しみがあります。

闇と静寂、打揚げる音、大きく幾重にも広がる光、ドーンという音、そしてまた闇と静寂。間も花火です。そうした闇、光、闇、光

という間に音楽がシンクロする。そのシンクロの心地良さ。そういう新しいスタイルの花火大会です。

とは言いつつ、みなさんには、酒を飲んでもらったり、わいわいやってもらって、花火が上がったらパッと見て『あー、いいなあー』と楽しんでもらえたら僕らはもうそれでいい。

花火を論じるのが好きな人には、大いに論じてもらって、それも良いですが(笑)」



水平線の  
花火と音楽

The wonderful future will come from tomorrow if it enjoys it today.